

## シイタケの栽培技術に関する試験

## —ほだ木管理と春季の発生について—

森食用菌専研究所 吉 富 清 志  
佐 藤 泰 生

## 1. はじめに

現在の乾シイタケ栽培は消費者の需要動向から、厚肉の冬菇、香菇が多く採れる低温性品種を用いた春作の栽培が主体になってきた。低温性品種は春に集中発生するものが多く、3月下旬から4月中旬の気温上昇時期に一斉開傘し、雨のあるときには尚、開傘が早く採取が間に合わず、雨子のバレル葉となる弊害がある。このように一斉開傘と作業の輻輳を避けるためには、きのこの生長を促進して、採取を早める必要がある。そこで芽切りのみられたほだ木に被覆材を被ぶせ、保温して、きのこの生長を早める簡易的な被覆栽培を行なったところ、計画的に採取乾燥ができ、同時に雨子防止にもなり良質のきのこが採取できたので報告する。

## 2. 材料と方法

供試ほだ木は53年春に接種したものをを用いた。ほだ場はカシ林内とクヌギ林内の異なる林分を選定した。被覆材は「ホダ木コート」の厚手を使用した。

## (1) カシ林内でのホダ木コートの使用

明るい環境を好む樹種で、雨透りがよくやや明るめで日射も均一であり、湿度もやや低く肉質の充実したきのこが発生する。低温性品種の最適林分である。ほだ木は12月上旬にヨロイ型に組んだ。散水を寒冷の刺激をうけた1月下旬に一昼夜散水を行なった。被覆はきのこが芽切ってから行ない、採取が全て終るまで続した。対照区は同じ林内にほだ木を合掌型に組んだ。

## (2) クヌギ林内でのホダ木コートの使用

冬期間は落葉して日射量が多い、この特性を生かし春子の早期採取を図った。

操作の方法はカシ林内と同じである。対照区は15年生の杉林内にはほだ木を合掌型に組んだ。

## 3. 結 果

## a. きのこの採取

カシ林内、クヌギ林内で散水したほだ木からは、2月の中旬に芽切りがみられたので直ちにホダ木コートを被覆した。

ホダ木コート区のきのこの採取は3月5日から冬菇

を中心に採れはじめ、対照区の3月12日より8日早められた。採取経過は図-2の通り、対照区の採取ピーク時に、ホダ木コート区では総収量の74%が採取できた。一方対照区は51%の採取であった。採取されたきのこの乾燥総収量は、ホダ木コート区が2,921g、対照区は2,551gであった。

クヌギ林内においてもホダ木コート区は、3月9日から冬菇を中心に採れはじめ、対照区の3月15日より7日早められた。ホダ木コート区は採取ピーク時に6日間で総収量の53%採取されたのに対し、対照区は3日間で総収量の52%が採取された。(図-1, 2)

## b. 採取されたきのこの銘柄

カシ林内でホダ木コートを被覆した区は、表-1の通り、採取されたきのこの銘柄は、冬菇・香菇が多く、1個の平均乾燥重量は3gで厚肉系のきのこであった。対照区は香信が64%と多く、次いで冬菇24%、香菇12%の順であった。きのこの1個平均乾燥重量は3.1gであった。

クヌギ林内でもホダ木コート区は、冬菇57%、香菇29%と多く、次いで香信の14%であった。きのこの1個平均乾燥重量は3.3gで厚肉系のきのこが多かった。対照区は、香信が80%と多く、きのこの1個の平均乾燥重量は2.3gと軽かった。

## 4. 考 察

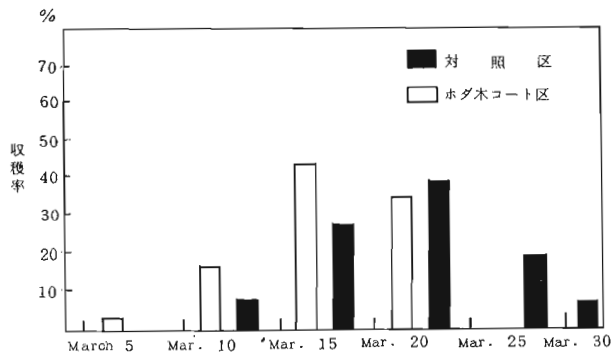
以上記したことからホダ木コートを使用する場合は次のような事がいえる。ほだ木の水分が不足の状態では、きのこの芽切り数が少なく、また形が小さいことから、ほだ木に十分吸水させて、きのこが芽切ってからホダ木コートを被覆することが肝要と思われる。被覆後は時々観察して、ほだ木が乾燥している状態のときは散水をして補水をするといよい。

きのこの生長については、寒冷期にホダ木コートを使用すれば採取の時期が早められたが、これはきのこの生長に必要な保温・保湿に効果があったからであろう。従って気温が高くなり、降雨の多くなる時期は、被覆内が高湿・多湿になり、きのこが一斉開傘して肉質の充実しない香信となるので、この時期はホダ木コートの下部を、まくるか取り除くことが必要である。

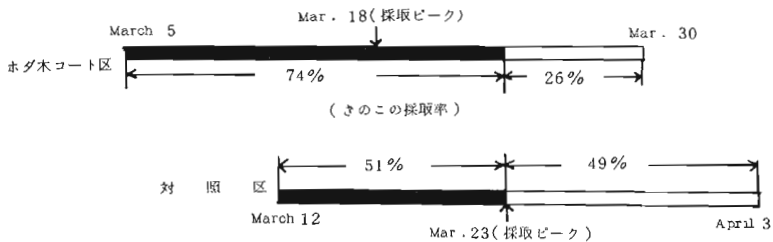
表一の、きのこ1個の平均乾燥重量が対照区と差異がないのはそのためであろう。このようにホダ木コートは寒冷期にきのこの生長を促進する効果があり、しかも良質の冬菇・春菇が採れることから、寒冷期に発生する低温性品種を使用することも大切と思われる。

被覆の方法は、上部を水平にすると雨が部分的に漏れて、そこのきのこの形質が悪くなるので、中央部を

高くして、傾斜を作れば内部への雨漏れを防ぐことができる。ほだ木の組み方はヨロイ型にすると、ホダ木コートがきのこに触れず適していると思われるが、他のムカデ型や合掌型で、そのままほだ場で使用する場合は、ホダ木コートがきのこに触れないような工夫が必要である。



図一 ホダ木コートを用いた被覆栽培における春子の発生経過 (カシ林)



図二 ホダ木コート被覆による春子発生の経過 (カシ林)

表一 採取されたきのこの乾燥銘柄 (カシ林)

試験区	1個重	採取されたきのこの銘柄		
		冬	香	香信
ホダ木コート区	3.0g	46%	23%	31%
対照区	3.1	24	12	64